

川口の蛇信仰

蛇と日本人の関係は古く、縄文時代には蛇をモチーフとした装飾を施された土器が存在していました。市内からも、蛇の装飾に影響を受けたと思われる土器が出土しています。

蛇は『古事記』『日本書紀』にも多く登場します。奈良の大神神社には三輪山の神として大物主が祀られていますが、『日本書紀』ではこの神は蛇の姿で現れます。

また、蛇を雷神と同一視する伝承もみられます。雷は稲妻ともいわれますが、これは稲の収穫時期に雷が多いため、雷が稲を実らせる力を持つと考えられたためという説があります。

山は川の源流であり、水の湧くところであることから、山の神は水を分ける水分の神の要素もあります。そして、雷の神であるとも考えられていたため、蛇は農耕の神としても信仰されます。

『常陸国風土記』では、夜刀神という角のある蛇の神が登場します。ヤトとは谷あいの土地の事で、水が集まる地形であり、また陽が入りにくい地形なのでしばしば湿地となりました。蛇はこうした場所の主とも考えられました。

こうした信仰が生まれる背景には、蛇の生態があると考えられます。水辺に住み、四肢のない不思議な姿であり、人をも一撃で倒す毒を持ち、それでいて鼠などから米を守ってくれる蛇は、恐ろしくもありがたい、神秘的な生き物と考えられたのです。

市内には藁で蛇を造る行事以外にも、蛇信仰に関連する行事や民話などが数多くあります。風土記の時代からそうであるように、蛇は湿地や沼の主であるとも考えられてきました。また、時を経るにしたがって蛇信仰もさまざまな形に姿を変えて、多様化していきます。藁で造る蛇は、江戸時代に駒込の富士神社のお祭りで売られ始めたことから流行し、江戸や近郊に広がっていきました。また、人の頭に蛇の体を持つ宇賀神は、元々インドの女神である弁財天と習合し、財をもたらす神として、同時に水の神として水辺に祀られるようになっていきます。

ここからは、多様な姿で現れる川口の蛇信仰と、それを通じて見える川口の歴史と風土を紹介します。